

講演2. 柴田 翔（東京大学名誉教授）

[柴 田] 最初にお詫びを申し上げておきたいのですが、ここにいらっしゃるの専門的に非常に優れた方々で、私も何人かの方のご本は読ませていただき、非常におもしろく、教えられたところが多かったのですが、先ほど申しましたように私は戦後民主主義育ちで、お互いに「何々先生」と呼び合うのが大変苦手です。大変申し訳ありませんが、みんな「さん」になると思いますが、よろしくお願いいたします。

堀田さんのあとが私だと聞きまして、非常に悪い予感がしました。昔、堀田さんと学内で一緒の委員会をしていて、こんな方をこんな委員に使うのはもったいない、もっとほかの話を聞きたいと思っていたら、今日は、はたして非常におもしろいお話を伺えて、たいへん幸せでしたが、その直後に自分が話すのはどうも気が引けます。

私は大した話はありません。ただ前回のこのフォーラムの記録を少し拝見すると、いろいろな分野の方で、言葉のニュアンスが少しずつ食い違っている気がしましたので、議論の基になるような道具を整理するようなことで私の務めを果たさせていただこうと思っております。

[進歩主義とはなにか]

記録にある昨年の廣田さんのご発言に「進歩はいいけれど、尺度によっては別の問題を生む」とあります。それでは「別の問題」を解決しうる進歩主義の後継ぎはなにかというのがこのフォーラムの基本的な問題意識であると理解した上で、それではそういう解決がそもそも可能なのかという問題があります。

これは'07年のフォーラムの総括的文書で拝見したのですが、物質科学系統の方はわりと楽観的なのに対し、生命科学系統の方の危機感が非常に深いという印象がありました。では人文科学はというと、一般的に言って、反近代とまでは言わずとも、非近代的な方向に望みを託す人が多い。しかしその多くは呼びかけにとどまっていて、自然科学の方から見て、一般論はいから具体的な問題に解答を出してほしいと言われてしまうのではないかに対しそういう不満を抱かれてしまうのではないかと、いつも思っていました。

ここにも鴨下さんがいらっしゃいますが、東大におりましたころたとえば医学部の方から、私の理解からすると、「人文学はもっとしっかりしてくれ。そんなことでは、例えばいま医学、先進先端医療などが当面している問題について、全然答えが出てこないではないか」と、いつも叱られているような気がしていました。医学部の方は非常に紳士的ですからそういう言い方は決してなさいませんでした。

で、今日はそういうところから出発して、多少、議論のための整理をしてみたいと思います。

進歩主義の後継者というとき、そもそも進歩主義とは何か。進歩ということは話がわかりやすい。何かが、より優れたものになっていくことです。しかも、人間の意思的な努力によって優れたことになっていくことが、進歩の根本義だと思います。しかし進歩主義とは何かというと、人間の社会が人間の意志的努力によって進歩することを信じる。つまり社会の問題がそこに加わる。

先ほど堀田さんのお話を伺っていても、結局、生命科学の発展を社会が受け止められるかどうか、非常に大きな問題が残っている、そこはほとんど手つかずだという気がしました。ところが進歩主義では、人間の社会は進歩するという基本がある。その際の進歩とは何か。単に認識が拡大するだけではなく、その認識拡大によって人間はより幸せに暮らせるようになる。それを進歩主義は信じているのだらうと思います。もちろんそこにさまざまな問題は生じるが、それは人間の能力によって克服できる、それが進歩主義の基本にある。つまり、認識や技術を幸せのために活用できるという基本的な楽観論がそこにはあると思います。

[進歩主義と近代]

振り返って考えてみれば、進歩主義は近代とともに生まれてきた考え方であって、似たような言葉がたくさんあります。近代主義や自由主義、民主主義、共和主義などさまざまなレベルの言葉ですが、これらの言葉はいずれも人間個々人の自立可能性や人間の自由の積極的意味を信じている。自由な人間は正しい判断ができる、そして自由な人間は自ずと自律的、調和的な社会を形成できる、だから束縛されない人間の自発的な行動は必ず正しい方向に向かう。そういうことを信じている言葉です。その意味で、いま並べた類縁の言葉はすべて進歩主義とつながり合っていて、同じことのさまざまな側面なのだと思います。

では、そういう近代が信じたものの一番の基本にあるものは何かというと、それは人間の個々人の自我の中核には理性があって、しかもそれは神の普遍的な理性を分け持っているのだということ、それが、ほとんど個別には意識されていない前提だらうと思います。

人間は理性的存在であり、かつその理性の本質は善である、つまり他者とつながる方向性を持っている、それが近代が信じた人間自我の構造と本質で、これが具体的に社会的な面などで展開されると、さっき言ったさまざまな言葉で言われているようなことになるのだらうと思います。

当然、進歩主義の発生はヨーロッパの近代です。私たちの世代はおそらくその最後の世代としてアジアの停滞などという言葉が高校生ぐらいのときに聞き知って、半分、腹が立つような、

半分、でもほんとうにそうかもしれないと思うような時代に育った世代です。

こういう進歩主義、つまり科学技術の進歩を生かせる人間の理性と善意を信頼している、あるいはもう少し言うと盲信していることと、自然科学、科学技術の進歩への信頼はパラレルになっていたと思います。

[進歩の諸相]

それでは具体的に科学や技術の進歩はどうなっているのか。まず科学について言えば、必ずしもヨーロッパ近代だけではなく、中世のイスラムの学問もあるし、中国の学問、古代の学問もありますが、いずれにせよ自然科学、つまり自然についての人間の認識は知的好奇心で支えられて進歩してきた。これには、堀田さんのお話でもよくわかるように、何の疑いもない、何千年もの間、進歩してきたし、今後も進歩して行くのだろう。

だが、それに対し、科学技術の進歩——それについても疑いはないが、しかしそれが何によって支えられてきたのかというと、そこには好奇心だけではなく社会的ニーズがあった。ここで社会という言葉が出てきますが、このへんのところから問題が出てきます。技術そのものに問題があるわけではありませんが、人間の幸せということからいうと、社会的ニーズというものがあとでなかなか曲者になってくる。社会的ニーズの充足イコール人間の幸せの増大、となるのかどうか。

社会は変化します。しかしそれは進歩なのかどうか。進歩といったときの評価基準は何か。評価基準を幸せと置くのか、あるいは人間の中にそもそもある潜在能力がより発揮されることをもって進歩と考えるのか。仮にそうだとすると、それでは人間の中の潜在能力とは何かとか、非常に面倒な問題がこのへんからたくさん出てきます。

神から与えられた潜在能力がより発揮されることにより人間は進歩していくと考えた人々もいますが、神から与えられた潜在能力とは何か、そんなものは発揮しないほうが幸せなのではないとか、いろいろな疑問、人文学のほうがかきちんと対応できていないと言われるような問題がこのへんから入ってきます。

社会はどのように変化するか。まず科学技術の進歩による暮らしの変化があり、その結果として、日々の暮らしの中での人間関係の変化、更に社会の変化が出てきます。やがて社会が根本的に変わる、昔流の言葉で言うと革命ですが、構造的歴史的变化が起きることも当然あります。そして、科学および技術の進歩とは無関係な、思想的な理由による主体的・自律的・内発的な社会変化もたぶんあるのだろうと思います。

進歩主義は、こういったさまざまな変化をすべて進歩と評価する、あるいは進歩だと信じる

わけですが、しかしほんとうにそうなのかどうかということが、現在いろいろと問題になっていることなのだと思います。

[進歩主義への疑念]

上でいう科学技術の進歩による暮らしの変化は、まずは非常に単純な話です。例えば電気洗濯機、電気炊飯器その他、さまざまな家電製品ができて、家事は圧倒的に楽になった。そんなことは人間の本質には無関係だという人もいそうですが、私はそうは思わない。例えば女性の社会進出もそれで大きく支えられた。しかしながらそういう生活の便宜性向上が社会をより深いところでどう考えたか、それは進歩かどうかとなると難しい。

例えば携帯電話機です。便宜性を追求して、そこに生まれた。しかし、その結果、人間関係がどう変わるかまであらかじめ考えてできたわけではない。技術というものは、そういうものだと思います。ところが、いまやカタカナ言葉の「ケータイ」になって社会を大きく変えつつある。その変化が人間の幸せにプラスかマイナスかは誰にも判らないが、もうそれを抜きにした社会は不可能になっています。

さらにそのことが人間の社会のどのような構造的歴史的変化を呼び起こすかということは人間の予測能力をはるかに超えていて、たぶん結果が現れてから、あれよあれよと慌てふためくのだろうと思います。

現代の私たちは一方で進歩の恩恵を大いにこうむっている。しかしそれでいながら進歩に対していつも不信感を持っている。私たちはダブル・バインドの状態にあって、進歩主義を単純に信じられなくなっています。情報技術が人間社会をどう変質させるのか、生命工学の成果を人間はどう受け止めるべきか、生命科学の進歩を医療にどう応用するか。そういう問題になると、本当にわからないことがたくさん出てきます。それから経済の発展が地球の限界と折り合えるかという、ご存じの温暖化の問題もあります。

技術はありますが、人間の集団である社会がそれを生かせるかどうかはまったく別問題であり、少なくともいまのところ答えを持っていない。そういう技術を、社会がきちんと自分の中に織り込んでいけるかどうか。社会、つまり人間集団が、すでに可能な技術をきちんと活用できるのかどうか。

そういうことに対して責任を負うべきは社会科学ないしは社会工学であり、より深いところでは人文学ないしは宗教、哲学その他ですが、少なくとも私が見るところ、まだ十分な答えは出ていません。私個人で言えば、何の見当もつかないということです。

[進歩主義の失敗]

進歩主義について歴史的に見たとき失敗をしてきた例が二つあると思います。ごく簡単に申しますが、まず第一に18世紀の末から19世紀に初期資本主義の時代がありました。初期資本主義は非常な問題を引き起こした。

資本主義は人間のエゴイズムを肯定して、それが社会を進歩させると考えた。全体的な社会の仕組みとしてそれでうまくいくと説明して、そういうものができたわけですが、イギリスの小説家、ディッケンズの小説を読むと、その結果、資本主義が最初に作り上げた19世紀イギリス社会がどんなに悲惨なものになったかよく判ります。

そこで反資本主義、理想主義としての社会主義が登場しますが、しかしそれが結局破綻したのは皆さんがご存じのとおりです。そのとき社会主義ないしは共産主義が考えていた前提は、一方では人間は本質的には善良なものである、資本主義というシステムが悪いので、それさえ取り換えれば、人間の本質的な善良性が現れるということが一方にあった。

そして同時に、計画経済で社会を見回して、その全体を把握する能力が人間にはある、だから個々の企業家たちの自由に任せないで社会全体を把握して計画通りにやれば、初期資本主義につきまっていた周期的恐慌—10年か20年に1度、19世紀のイギリスは恐慌にさらされていたそうですが—そんなものは簡単に克服できると信じていた。

しかしそれが大失敗であったことは、われわれが知っているとおおりです。人間はもっとエゴイスティックなものであり、かつ社会全体を見通すような広大な理性は誰も持っていない。社会主義は特権階級の独裁になり、人間理性の壮大な計画が不能率の極に至ったのがソビエト経済でした。

余談になりますが、昔、シベリア鉄道に乗ったことがあります。そのときにイルクーツクまで飛行機で行って、シベリア鉄道に乗ろうと思ったら、天候が悪くてイルクーツクに行く飛行機が遅れて、予定の列車に間に合わなかった。地元のインツーリストの人がホテルを探し、翌日の列車に乗せてくれましたが、「私が乗る予定の列車はどうなった？」と彼に聞いてみたら、その人はとても親切な人でしたが、ニコニコ笑って、「あれは空気を乗せて、モスクワまで行ったよ」と言うのです。4日間、モスクワまで空気を乗せてずっと行くわけです。なるほど、これはなかなか大変なものだ、計画経済、社会主義システムというものは能率が悪いものだと思ったことを覚えています。そういう官僚主義的不能率が重なった挙句、1990年代初めの社会主義崩壊に至ったということをご存じのとおりです。

しかし、社会主義が崩壊に至るまでは、資本主義の側に、戦後の日本などが典型ですが、あ

る種の修正主義がずっとあったと思います。一方で社会主義がありますから、資本主義もそうあこぎなことではできない。社会があまり不安定になると社会主義化してしまう怖れがありますから、例えば組合、あるいは組合の連合体と適当に意識的、無意識的に談合して、社会の安定を保ちながら、どうやらこうやら戦後の資本主義はそれほどひどい社会にはならず、90年代ぐらいまでできたのだらうと思います。

ところが社会主義が1990年前後に崩壊したあと、世界の資本主義は警戒すべき相手がいなくなりました。それで現代資本主義の時代が始まるわけですが、これが日本の社会をどう変質させたかは、このごろ新聞に毎日出ておりますから申しません。

こうして、歴史的に出現した二つ進歩主義的社会はともにひどいことになってしまったわけです。科学ないしは技術の進歩ではなく、進歩主義を社会的なシステムとして100%容認した場合にどうなるか、二つの実験は両方とも、なかなかひどいことになってしまったという気が私はしております。端的に言えば、人間理性には限界があり、人間のエゴイズムは制御できなかったと言うことです。

[進歩主義への懐疑]

それではそういう進歩主義への懐疑は初めからなかったのかというと、進歩を信じなかった人たちも歴史の中にいろいろいました。私が専門としているゲーテもその一人です。そういう人たちのことを少し話したいと思います。

ゲーテは近世から近代の転換期に仕事をして、人間ないしは人間社会、あるいは人類というものの善も悪も非常にリアルに見通した人で、社会的、歴史的な予言的な発言がたくさんあり、これから始まろうとする近代がひどい時代になるのではないかという批判をすでにしていました。1809年に書かれたゲーテの小説『親和力』の中に、二人の人物の対話があります。中世ヨーロッパの街は壁で囲まれていましたが、啓蒙の18世紀になって、それが壊された。一人の中年の知的な貴族の女性が、「われわれの時代は進歩していますね」と言うのです。「人間はどんどん広い、自由な空間に出てくる。これからは人類にとって本当にいい時代がきますね」と言うのと、その対話の相手が、「そんなことはありません。人間はまたいつか、きっと高い城壁の中に閉じこもることになるでしょう。人間というのはそういうものです」という意味のことを答えます。

実際、城壁こそ築きませんでした。ヨーロッパは19世紀の後半から20世紀の初頭、第1次世界大戦にかけて、国民国家同士の絶えまない戦争の歴史になった。それを進歩の世紀と言われた19世紀の冒頭において、すでに予言している言葉です。

また晩年には『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』という小説があります。ゲーテの若い時代、アメリカは一種の希望の象徴で、ゲーテも若いころ恋愛相手と、いっそアメリカへ逃げようかという話をしていたこともあったようですが、晩年のこの小説にもアメリカが出てきます。旧世界ヨーロッパにはもう限界がある、広大な新大陸でこそ理想の世界が築けるのではないかと思う人たちがいるのに対して、そうはならないという人間が出てきます。

確かにアメリカは非常に広いけれど、その広さ自体が人間にとって障害になる。人々は身を守るために、あの広いアメリカの中に壁を築いて、その中に閉じこもるようになるだろう。彼はそう言います。最近アメリカではゲーテッドタウンと言うのでしょうか、ある広大な区域を高い壁で区切り、警備員を置いて、その中で金持ちたちが暮らす町がふえているそうですが、そのことを聞いた時に、私はこの言葉を思い出します。

同じ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』にマカーリエという非常に不思議な女性が現れてきます。細かいことを申し上げる時間はありませんが、宇宙史の秩序あるいはむしろ調和というものがある、それが描く大きな動きを自分の精神と身体に映し出す女性ですが、彼女だけが心弱き人間を最終的に救済できると、ゲーテによって語られています。

ゲーテが近代がこれから始まるという時期に、その原理的限界について考えていた人だとすれば、チャーホフは、19世紀という近代の1世紀が終わったところにいた人で、しかも後進国ロシアにいた人でした。彼の一愛読者として言えば、彼の作品は、世界の大きさ、底知れなさに比べて人間がいかに小さく弱いものであるか、またたとえば鉄道が敷かれ、文明が拡がり、社会は進歩するけれども人間の個人個人の人生は決して進歩せず、人間の悲しみは続く、しかしそれでも、人生はなお愛すべきものであり、生きるに値する—彼の作品はそういうことをしみじみと悟らせるのです。

チャーホフの戯曲から、いくつかの言葉を紹介したいと思います。有名な『桜の園』にロパーヒンという人物がいます。彼は専制的なロシアの農奴身分に生まれながら自分の才覚だけを頼りに商人に成り上がって、どんどん財産を増やしていった。子供のころは農奴だったのに、今では有力な事業家になっていて、それこそ19世紀の進歩主義を体現した人ですが、その彼がふと言う台詞があります。以下チャーホフの翻訳は神西清氏のものです。

「神よ、あなたは実にどえらい森や、果てしない野原や、底しれぬ地平線をお授けになりました」、これを読むと、いかにもロシアだなという気がします。「で、そこに住むからには、われわれも本当は、雲つくような巨人でなければならんはずです……」、大きさも雲つくような巨人でなければならぬ、心もまた、それにふさわしいような大きな心を持たなければならぬ。

ロパーヒンはそこまでしか言いません。しかし彼が言いたいのは、ところが実際に神が作った人間は、自分も含め、本当にけちで、日々の利害にあくせくして、全然先が見えない。どれくらい森や、果てしない野原や、底しれぬ地平線にはとうてい太刀打ちできない存在でしかないということです。新興ブルジョワジーのロパーヒンの心にさえ、進歩の根底にあるはずの人間の能力への疑いが浮かぶのです。

もう一つ、『三人姉妹』のトゥーゼンバフの台詞を聞いてみて下さい。彼は自分の額に汗して働く暮しに憧れて、特権的な軍人の身分を捨て、市民になる。その意味で、歴史の進歩と市民社会を信じようとする人間ですが、しかし彼はこうも言います。

「我々のあとでは、人が軽気球で飛行するようになるでしょうし、背広の形も変わるでしょう。もしかすると第六感というやつを発見して、それを発達させるかもしれない、しかし、生活（人生）は依然として今のままでしょう。生活（人生）はやっぱり難しく、謎に満ち、しかも幸福でしょう。1000年経ったところで、人間はやっぱり『ああ、生きるのは辛い！』と嘆息するでしょうが—同時にまた、ちょうど今と同じく、死を恐れ、死にたくないと思うでしょう」。

物質生活は進歩する。しかし人生は永遠に謎に満ちたものであり、だからこそ辛くとも幸せなのだ。トゥーゼンバフは愛する女性から、尊敬はされているが愛し返してはもらえない。彼は不幸なのですが、でも人生は生きるに値すると言っているのです。これはひたすら明るい生活を目ざす進歩主義に対する人間の、個々の小さな生活のところからの懐疑なのだ、私には思えます。

[疑うことの力]

以上、ゲーテやチェーホフは近代の進歩主義を疑った人たちでしたが、ではこれからわれわれはどこに行くのか。もちろん私にその行き先がわかるわけではありませんが、過去の彼らのように疑うことの力は非常に大きいのだらうと思っています。

自然科学と科学技術の進歩は、知的存在となってしまった人類の宿命だと思います。過去のどこかで人類にそういうスイッチが入ってしまって、知的好奇心で進歩せざるをえなくなっている。しかし進歩主義からは、人間は自分を解放したほうがいいのではないか。進歩の結果、自動的に幸せがくるという信仰からは解放されたほうがいいのではないか、謎に満ちた人生のささやかな幸福にその進歩は役に立つのかどうか、常に疑問を出して考えていく—それが人文学や文学、哲学、宗教等の役割ではないか。

私に言えるのは、せいぜいそれくらいのところですよ。社会の量的な進歩ではなく、人間個人個人の内的幸せの深化—それを求める。そういう知恵なしに進歩主義を信奉するのは危うい。

だから進歩主義の後継者は、もう進歩主義ではありえないのではないかと私は考えます。

ただそこには危険もあるということは申したいと思います。それは進歩主義批判、近代批判が、ヨーロッパ以外の文化圏の思想の無批判なもたれかかりになることです。特定の文化圏を理想化したり、特にアジア回帰、日本回帰という形で、自分たちの過去を自己満足的に肯定する方向性は非常に危険だと思います。

私たちの前には、私たちの問題がある。それに対し具体的に考えて行くことしか人文学が仕事を果す道はないのだらうと思います。

こうすればいいという答えもない話でしたが、どうもありがとうございました。(拍手)

[廣 田] ありがとうございました。それではご質問、あるいはコメントをお願いします。どうぞ。

柴田 翔氏の講演についての討議

[御園生] 大変興味深く、私自身もおっしゃるとおりだと思いながら聞かせていただきました。本当はあとで議論すべきことかもしれませんが、最後のところについてのお考えをもう少し伺いたいと思います。例えば50年先、2053年でもいいですが、堀田さんのお話は、やはり基本的に進歩主義ですね。決定論的であることもそうだし、将来、科学の力で問題が解決できるという楽観論が根底にあるのではないかと思います。

私は工学、技術という非常に不確実な面のある世界を扱っていると、なかなかそうは思えないところがあります。いろいろな人がいて、技術で全部解決できる、行け行けどんどんというタイプの人がいれば、非常にペシミスティックになっている人もいます。私はどちらでもない、中間ですが、50年先の日本や世界の社会を見たときに、どのようになっていけばいいというふうにお考えですか。

例えば量的進歩ではなく質的進歩にライフスタイルを変えるとか、価値観を変えるとか、そういうお題目は皆さん言っていますが、現実にはあまりその方向に社会は動いていません。むしろ、少なくとも短期的には逆の方向に動いています。もっと短期的に見ると、資源エネルギーや地球温暖化などよりも、政治や経済、国際政治のほうが混迷をきわめています。これはたぶん、もう少し経つと解決して落ち着いてくるのではないかと期待していますが、そのあとにどんな日本、あるいはどんな世界があるのでしょうか。あるべしということではなく、どうなっていくのでしょうか。

地球温暖化に対して、私はそれほど大きい危機感を持っていませんが、資源エネルギーの問題に関しては危機感を持っていて、このままではいけないということは見えていると思います。そのためには、いろいろやることはありますが、かなりブレーキがかかってきたとはいえ、やはり先進国がやっているような方向で進めていたのでは成り立たないということは見えています。先生がおっしゃるように質的進化が大事だ、ライフスタイルを変えなさいといっても、実際にはほとんど変わらない。

その中であって、無責任に聞いて申し訳ありませんが、先生はどんな50年後があるべし、あるいはあったらいいなと思っていられっしゃいますでしょうか。

[柴田] まったくわかりませんが、昔ローマクラブの『成長の限界』が話題になった頃から不思議に思っていることを言えば、例えば低成長といっても最低、年に2%、3%の成長をしないと社会の活動というか、回転というか、それがうまくいなくなる仕組みとは、いったい何なのか、という疑問です。1年に1%にしても、それは小さいように見えるかもしれませんが、いまとっさに正確にはわかりませんが、10年たてば10%には越えて、それが100年積み重なれば3倍近くではないでしょうか。

日本は戦後、高い成長率を続けてきて、つい先日まで1億総中流と言われていましたが、少し成長が停滞すると、たちまち社会がおかしくなり、飢える人間が出てくる。今年飢える人がいなければ成長率ゼロで来年も飢えないはずなのに、飢えてしまうというのは社会システムのどこかに、何か間違ったことが組込まれているのではないかという気が昔からしています。

このへんはもちろん社会科学の分野で、私には正確なことはわかりませんが、常に疑問に思っています。技術の進歩は人類の宿命だと思いますが、成長のための進歩だけが技術の進歩なのかどうかということです。

工学の方はどうお考えになるかお伺いしたいのは、技術は知的な好奇心によって進歩していくのか、それとも社会のニーズによって進歩していくのか。また、仮に社会のニーズによってだとすれば、それは自ずと出てくるのか、それとも何か社会的なメカニズムによって生み出されるのか。このへんは社会学者の方にお伺いしたいところです。もう一言つけ加えれば、私はいわゆる社会のニーズと個々人の幸せの増進との間にはいつもズレがあるような気がしています。50年後の生活の在り方という問題から離れてしまったようですが、その辺のことが判らないと、なかなかイメージが結びません。

[御園生] 工学では社会のニーズがメインの駆動力です。人によって考え方は違うと思いますが、社会のニーズに合うもの、必要とするものを作っていく。それを設計するのが工学で、そ

のさい、近代科学がその最重要なベースになっているという点で工学と理学はつながっているのだと私は理解しています。

その社会のニーズに合わせているだけですと、いまの社会のニーズは、放っておけば便利で、大量で、早くて、多機能でという方向に圧倒的にいっているし、言い方は悪いですが、それに迎合するようにものを作っているわけです。そこを、堀田さんの言い方ではありませんが、逆回りするような仕掛けがない限りは、心配している方向にいつてしまうのではないかと。

とことん悪くなれば、さすがにみんな気がついて違う方向に動き出すとは思いますが、われわれとしてはそこまでいく前に、もっと早くいい方向に動くためには、社会のニーズ自身、みんなが何がいいと思うかという価値観が変わってこないと、いまの厳しい状況は変わらないのではないかと考えています。

[柴 田] 社会のニーズは単に人間の集まりである社会があってそこから出てくるのではなく、社会のシステムの問題があって、こういう社会システムだとこういうニーズが大きく出てくるということがあって、そういう意味では社会システム自体が変わってくれないとどうにもならないのではないかと。

社会システムもスタティックに静止しているものではなく、少しずつ動いているのでしょうけれど、それが大きく変わる兆しがあるのかどうか。これは歴史学でいうと、過去にはどういう時にどういう大きな社会変動、社会システムの変化があったかということになるのですが、あとは社会科学の方に教えていただきたいと思います。

[井 村] 大変おもしろい話をありがとうございました。知的存在となった人間の宿命としての、進歩というのは、確かに私も同感です。人類の進化から見て、人間はやはり宿命的に知識を追求していくというふうになっていると思います。だからこれは避けがたい問題で、それが人類の滅亡につながるかもしれない。しかし、それをつなげない知恵が必要だろうと思います。

少しおっしゃった進歩主義で、いろいろな問題が生じてきている。それを進歩によって克服できるという楽観論ですが、これは大変大きな問題だろうとっております。実は総合科学技術会議にいるときは研究費を増やしてもらわないといけなくて、私は常に、それはできるのだと言ってきましたが、いささか詭弁であると思っております。

特にサステナビリティというものは、進歩しながら、経済を拡大しながら、本当にサステイナブルなのか。先ほどローマクラブのお話がありましたが、そういう中で本当にサステイナブルかどうかということは、もう一度きちんと予測していかないといけない。

最近マスコミではサバイバリティという言葉も使っていますが、サステイナブルは、たぶ

ん難しい。地球上の人間がすべてが現在の日本人と同じレベルの生活をしようとしたら、おそらく資源は枯渇してサステナブルにはならないだろうと思いますので、そのあたりはある程度科学的に予測できるところもあるわけですから、きちんと再検討をしていく必要があるのではないかと思います。

したがって柴田さんにお尋ねしたいのは、サステナビリティという考え方をどういうふうにお考えになるかということです。

[柴 田] これは基本的には人間の欲望の在り方に関わる問題だと思います。昔から考えることですが、人間の自然な欲望には限界があって、自分としてうまいものを食いたいと思っただけの限りは大したことはない。しかし、隣の奴よりもよりうまいものを食いたいと思うところがそもそもの間違いの始まりではないかと思っています。そうすると宗教の問題などに踏み込むよりしょうがないのではないかと。

それからこれも若いころからよく思ったことですが、どの社会でも必ず一つ何か宗教がある。ところが戦後の日本は、ほとんど宗教がない稀有な社会であるという気がします。別に特定の宗教である必要はないのですが、何か人間を越えるものに対する畏怖の念が高度成長の中で消えて行った。ヨーロッパでも宗教の力は弱くなったようですが、日本は戦後、無宗教社会の最先端にいたのだと思います。もちろん無宗教であることのいい面もたくさんあると思います。私なども小学生のときに国家神道をさんざん強制されまして、あれから解放されたのは非常な解放感でしたが、しかし、特定の宗派ではなく、もっと根元的な意味で宗教的感覚—人間を越える大きなものへの感受性を呼び起こすことが新しい社会システムが生まれる元になるのではないかと。

考えてみると、いまの資本主義は人よりもよりうまいものを食いたいと思う力を原動力にして成り立っているのだと思います。中世にも内心、人よりもうまいものを食いたいと思っただけの人はもちろんいたと思いますが、しかし社会の公的な原理としてはそうではなかった。いわゆる狭い意味の社会科学レベルの問題ではなく、そこまで踏み込んだ新しい社会の構築が必要ではないのだろうか。そんなことを漠然と思っている程度です。

[井 村] 私も宗教は非常に重要だろうと思います。というのは、地球上のいろいろな人種で、何らかのかたちで宗教的な思想なり感覚を持たない人、部族はないと思います。先ほど堀田さんが言語の話をされました。言語についてはわれわれは遺伝的な素因としてあるインネイトな能力を持っている、それによって、それぞれの生活してきた環境の言語を覚えるという考え方がチョムスキー以来、非常に広まったわけですが、宗教についても、脳の中に何かあるものを

畏れるインネイトなものがある、それがそれぞれ生活する環境で宗教的なものに発展してきたのではないだろうか。そういうあたりももう少し考えてみる必要があるかなと思っております。

最近、脳科学がかなり進んできて、人間の宗教的な信仰心は脳のどのへんにあるという報告まで出てきています。それが正しいかどうかはわかりませんが、何か自然を畏れるとか、何か未知のものを畏れるというものを感じ、それによって行動を規制するインネイトなものを、長い非常に厳しい進化の過程の中で脳の中に発達させてきたのではないだろうか。そのあたりはこれからの一つの課題ではないかと思っています。

[廣 田] よろしいでしょうか。それでは次に山折さんにお話をお伺いしたいと思います。先ほど会が始まる前に、ひととおり皆さんに自己紹介をしていただきました。山折さんは自己紹介をされる必要がないぐらい、皆さんはよくご存じだと思いますが、その点にも冒頭で少し触れていただければ大変ありがたいと思います。